書 評・紹 介

鈴木継美・大塚柳太郎・柏崎　浩著

『人 類 生 態 学』

東京大学出版会，1990年，iv + 231pp.

21世紀にかけて人類が解決の途を見出さなければならない最大の課題は環境問題である．しかも，それは一部の国や地域の環境問題ではなく，人間の生存を可能にしている地球自体の環境問題といえるであろう．人類が長い歴史の中でかつて直面したことのない次元の問題，いいかえれば人類の生存にかかわる問題である．多くの生態学者は，1990年代にどのような環境対策がとられるかによって，人類の生存か，破局かが決定されるという．つまり，人間と環境との関係はこのような極めて切迫した段階に達している．

このような人間と環境については，極めて学際的な広い視野からの分析が必要であるが，この分野を担当する人類生態学の歴史はそれほど古くはなく，また一般の理解もなおはなはだ乏しい．このような学問的背景の中で，ここで紹介する鈴木，大塚，柏崎の３人の専門家による『人類生態学』は，そのような意味でまことに時宜を得たものといえる．

本書は東京大学医学部保健学科に人類生態学教室が創立されてから今日に至る20年間の研究成果を体系化したものとして，極めてユニークな特徴をもっている．第１章 人間とその環境，第２章 環境と人間を繋ぐもの，第３章 人間の適応のとらえ方，第４章 現代社会と人類生態学の４つの章から構成されており，それぞれほぼ50ページでバランスのとれた配分となっている．

本書は人口学との関係において注目すべき特徴がみられる．それは人口学においてとり扱われる主要なトピックはすべてこの人類生態学においても包含されていることである．たとえば，“産業革命と人口転換”（第１章の３），“疾病，死因”（第２章の７），“長寿命”，“人口再生産のメカニズム”，“人口変動”（第３章のそれぞれ９，10，11），“都市化，産業化と人間”，“今後の人口移動”，“長寿命と高齢化”（第４章のそれぞれ12，13，15）というように，人口学におけるもっとも基本的現象というべき出生，死亡，移動およびその総合的結果としての人口変動（増加，減少や将来推計）が論じられている．しかし，これらの人口上の変動も人間の環境への適応といった観点からとらえられており，人口学の視点とは異なっている点に特徴がみられる．この点からも人口学者にとって興味深い新しい知見を提供する．

今日の環境悪化の基本的原因は，すべて人間の行動の結果である．科学技術の進歩は生活水準の著しい上昇をもたらしたが反面において，エネルギーの消費過大による環境悪化や資源の枯渇を惹き起こしている．このような環境悪化や破壊は人口の激増によって加速化される．世界人口は1987年に50億，1990年には53億に達したと推計されているが，あと10年で約10億近く増加して2000年には62.5億になる．現在１年間に１億近い増加が持続している．さらに2025年には85億と推計されている．このような人口激増と１人あたりの生活水準の上昇が加わるとすると有限の地球と環境の悪化は人類の生存を危機に導くことは明らかであろう．

このような人口変動における戦後の人口の爆発的増加は，地球環境の悪化に直接的な影響をもっているだけに，人口学と人類生態学との共同研究を深化させることの必要性が痛感される．人類と環境とのどのような適応が可能であるかといった理論的，政策論的研究は両分野の専門家の密接な研究体制の樹立が望まれる．

本書の著者等は，新しく勉強する若い人達を対象としているようであるが，現代社会における人類生態学的視点の重要性（まえがき）は他の分野の専門家にとっても特に重要な指摘である．

なお，ここでの“人類生態学”は，社会学の一部門として考えられている人間生態学や，社会生態学とは異なっていることを付記しておこう．

（内野澄子）